

令和6年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

芥川高校がめざす学校像は『豊かな人間力とグローバルな視点で、自ら考え行動し、主体的に進路を切り拓く力を持った生徒を育てる学校』。

1 自ら考え行動し、自律的・主体的に学びに向かい進路を切り拓く力を持った生徒の育成

2 自己肯定感を高め他者を尊重する態度を養い、高い規範意識と人権意識を備えた豊かな人間力を持った生徒の育成

3 多様性や異文化を理解する態度を備え、豊かな教養とコミュニケーション能力を身につけた、グローバルな視点で考え社会に貢献できる力を持った生徒の育成

2 中期的目標

1. 自ら考え行動し、自律的・主体的に学びに向かい進路を切り拓く力を持った生徒の育成

(1) 学力の向上（授業力向上）

ア：生徒が確かな学力を身につけ、好奇心を掻き立てられる授業となるように、教職員がいつでも、どこでも、だれとでも相談できる環境づくりと組織的な取り組みを推進する。

イ：言語活動を充実させ、主体的かつ論理的に自己を表現する思考力、判断力を養う。ICT等をより効果的に活用し、学習効果の可能性を追求していく。

ウ：観点別学習状況の評価（観点別評価）の活用により、生徒が自ら学ぶ力を高め、教員は指導と評価の一体化を実感する機会を得る。

＊授業アンケートの授業満足度は、今後も満足度 80%以上を維持する。(R3：85.0% R4：85.7% R5：86.6%)

(2) 希望進路の実現

ア：望ましい勤労観・職業観を持ち、主体的に進路を選択できる力を育むキャリア教育を推進する。

イ：「学力生活実態調査」を活用し、一人ひとりが希望進路に向けて頑張りきれるよう、きめ細かい進路指導を行う。

＊生徒向け学校教育自己診断における進路指導への満足度 90%以上とする。(R3：90.1% R4：87.9% R5：90.7%)

＊希望進路達成率は今後も 85%以上を維持する。(R3：84.6% R4：89.3% R5：88.4%)

2. 自己肯定感を高め他者を尊重する態度を養い、高い規範意識と人権意識を備えた豊かな人間力を持った生徒の育成

(1) 体験学習の充実

ア：保育園実習等を通じて、福祉ボランティアに関する学びとキャリア意識の醸成を図る。

イ：地域や外部の諸機関と連携した体験活動の充実を図る。

＊生徒向け学校教育自己診断における地域との関わりに対する肯定率を令和8年度には 78%とする。(R3：64.2% R4：66.6% R5：75.0%)

(2) 学校行事、部活動の振興

ア：学校行事を通して自ら考え主体的に行動し協働する力を養う。また、地域等へ広く公開することで地元とつながり、生徒のシティズンシップを育む。

イ：部活動の入部率及び定着率を高め、その活性化とメリハリのある活動により学習との両立を図る。

＊部活動加入率（6月集計）を令和8年度には 75%とする。(R3：72.5% R4：74.5% R5：73.6%)

(3) 規範意識の醸成

ア：身につけさせたい規範意識を教員間で共有し、全体指導から学年・学級指導、個別指導につながる段階的な指導を徹底する。その指導がめざすところを生徒に説明、理解させ、主体的にルールやマナーを守ることができるように導く。

イ：あらゆる機会をとらえて規範意識の向上を図り、学校を「皆が安心して生活できる場」となるようにする。身の回りの人を尊重し、挨拶がしっかりとでき、時間を守ることができる生徒を育成する。

＊生徒向け学校教育自己診断における規範意識に関する設問の肯定率を、令和8年度には 95%とする。(R3：94.0% R4：92.2% R5：94.5%)

(4) 人権意識の向上

ア：すべての学校教育活動を通じて一人ひとりを大切にし、大切にされる人権教育を推進する。

イ：生徒と教職員がお互いに、お互いを尊重し、共に学び、学校全体として人権意識を高める取り組みを実施する。

＊生徒向け学校教育自己診断における人権教育に対する肯定率 85%を維持する。(R3：84.0% R4：84.2% R5：91.9%)

3. 多様性や異文化を理解する態度を備え、豊かな教養とコミュニケーション能力を身につけた、グローバルな視点で考え社会に貢献できる力を持った生徒の育成

(1) 使える英語力の育成

ア：大学等の外部機関との連携により、「グローバル専門コース」の取り組みの継続・発展と、英語4技能の育成を図る。

イ：4技能を様々な場面、様々な形で用いて英語に触れる機会を多くもつことを通して運用能力の向上を図る。その結果として、生徒の英語に関する資格への関心を高め、実用英語技能検定等の資格取得や英語学力調査で得点率向上をめざす生徒を増やす。

＊実用英語検定資格取得者を、令和8年度までには 70 人以上とすることをめざす。(R3：56 人 R4：61 人 R5：48 人)

(2) 国際感覚の育成

ア：交流生の派遣や受入れ、手紙、オンラインでの交流等、多様な形態での国際交流を促進する。

イ：異文化理解をテーマとする国内修学旅行の実施等、国内において実施可能な形で異文化に触れる機会を創出する。

＊生徒向け学校教育自己診断における異文化理解の取り組みへの満足度 80%以上を維持する。(R3：71.2% R4：75.2% R5：86.1%)

4. 信頼される学校づくり（教員力と情報発信力の向上）

(1) 次世代を支える教員の育成とチームとしての教員力の向上

(2) 教職員の働き方改革による時間外勤務削減

(3) 開かれた学校をめざした、学校情報の積極的な発信

(4) 中学生やその保護者に対する、芥川高校の魅力発信

＊生徒向け学校教育自己診断における教員の協力体制に関する肯定率は、今後も 85%以上を維持する。(R3：86.1% R4：87.2% R5：88.5%)

＊保護者向け学校教育自己診断における情報発信に対する肯定率を、令和8年度には 85%とする。(R3：82.4% R4：80.6% R5：84.3%)

＊学校説明会・オープンスクールへの中学生および保護者の参加人数を、令和8年度には 1100 人以上とする。(R3：1124 人 R4：1096 人 R5：990 人)

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和6年12月実施分〕	学校運営協議会からの意見
生徒アンケート結果より ・質問全 24 項目中、前年度より肯定的回答率がアップした項目が 23 項目、ダウンした項目が 1 項目であった。5 ポイント以上アップした項目は 8 項目、5 ポイント以上ダウンした項目はなかった。肯定的回答が 90％を上回る項目数が昨年度の 8 から今年度は 17 へと倍増した。 ・10 ポイント以上の大幅な変動があったのは「海外の交流生と関わる機会」(15.5 ポイントアップ)であり、一昨年度から見ると 41.2 ポイントアップしている。新型コロナウイルス感染症による規制が緩和され、海外の交流校への語学研修派遣（昨年度）・交流校生受け入れ（今年度）とオンライン交流、昨年度より取り入れている授業内での留学生との交流など国際感覚を育む取組みが充実したためと考えられる。 ・「海外の交流生と関わる機会」以外にも 2 年続けて肯定的回答が前年度より 5 ポイント以上アップしたのが「1 人 1 台端末の効果的活用」「悩みなどを気軽に相談できる先生が存在」「政治的教養について学ぶ機会」「授業や部活動等での地域との交流」の 4 項目であった。また、進路指導に関する質問 3 項目すべてにおいて肯定率が 90％を上回ったのは、過去近年の 8 年間で初めてのことである。多くの教職員がそれぞれに教育内容改善の意識を持ち、多岐にわたって取り組んだことが生徒にも伝わり、肯定的に受け入れられたものと考えている。 保護者アンケート結果より ・質問全 22 項目中、前年度より肯定的回答率がアップした項目が 19 項目、ダウンした項目が 3 項目であった。5 ポイント以上アップした項目は 4 項目、ダウンした項目の下げ幅は全て 1 ポイント以下であった。 ・生徒同様、「1 人 1 台端末の効果的な活用」についての肯定的回答が 2 年続けて 5 ポイント以上アップしており、着実に活用が進んでいることを生徒・保護者に実感されていると言える。「子どもの悩みなどの相談に乗ってくれる先生が存在」が 4.8 ポイントとアップ幅が大きいことも生徒と同様の結果となった。国際理解や福祉ボランティア等を学ぶ機会の設定についての肯定率が昨年度から 6.1 ポイントアップ、行事の工夫が 2 年続けて肯定率 90％以上となるなど、近年充実させた取組みについて保護者からも一定の評価が得られていることがわかる。 教職員アンケート結果より ・質問全 38 項目中、前年度より肯定的回答率が 5 ポイント以上アップした項目が 12、ダウンした項目が 2 であった。そのうち 10 ポイント以上の変動はアップしたものが 2 項目、ダウンした項目はなかった。 ・「生徒が満足できる授業づくりの工夫」について学校として取り組んでいるかの設問は肯定率が 6.1 ポイント下がり、2 年連続の減少である。一方で「教員間での授業方法の検討」については昨年度からほぼ横ばい、この 2 年間で約 10 ポイント上昇している。授業改善が個々の工夫から学校全体の取組みとできるよう、新たな仕掛けを検討したい。 ・一昨年度から昨年度にかけて 10 ポイント以上ダウンした 1 人 1 台端末の効果的活用に関する質問は、昨年度から 8.7 ポイント上昇して肯定率が 85％を超える水準に戻った。人によって使用頻度は様々であるが確実に活用は広がっており、日常的に使うツールとして活用できている手応えを実感できているものと考えられる。 ・「海外の交流生との関わり」の項目は 2 年続けて肯定率が大幅にアップし、今年度は 95.8％に達した。コロナ禍での制約がほぼなくなったことに加え、昨年度より充実・発展に多くの教職員が力を尽くしている種々の取組みが、教職員間で共有され評価されている結果であると考ええる。本校の特色である大きな柱となる取組みであり、負担が過度にならないよう留意しながら、現在の取組みを継承発展させていきたい。 ・部活動の活性化について肯定的回答が 19.5 ポイントアップした。1・2 年生の 6 月の部活動加入率 86.8％(1 年生に限ると 9 割以上)、11 月時点でも 85.0％とほぼ維持できていることも併せ、「学校生活を大事に」という方向性のもとに、新入生へのクラブ加入の働きかけと入部した部員へのフォローに教員がこれまで以上に注力した成果であると考ええる。 ・チーム力に関する項目の肯定率は昨年度からアップしており、中でも「問題事象への組織的対応」は 19.0 ポイントアップして 95.8％、「学校運営への教職員の意見の反映」は 8.7 ポイントアップして 87.3％となった。「気軽に相談し合える職場の人間関係」の項目も 90％を超える肯定率を維持している。教職員のチーム力の向上を多くの教職員が意識し、より良い集団となるよう努力してくれた結果であり、今後もこの状態を大切にしながら、生徒と教職員がともに育つ学校であり続けたい。	第 1 回学校運営協議会 ① 開催日 令和 6 年 6 月 21 日（金） ② 学校運営協議会からの意見など ・学校経営計画の中期的目標に「確かな学力」という文言を追加したことを報告、中期的目標を毎年改善している点を評価する意見があった。本年度の取組内容に関して、英語検定等の資格取得者数が減少傾向にある理由について質問があり、受検者が年々減少傾向しており、サポート体制を強化している旨を報告した。委員からは、全国的に見ても英語に対して苦手意識を持つ生徒が増えていることを教示していただいた。また、教職員の働き方改革に関する項目として、学校部活動方針（休養日等）の遵守及び全校一斉退庁日の遵守、教職員一人当たりの月間平均超過勤務時間削減の数値目標を追加した旨を報告した。 ・4 月からの学校の様子について、新学期初めに学校生活がスムーズに始められるよう、全クラスでクラス開きの時間を設けたことを報告し、委員からは人間関係の醸成に取り組んでいることを評価すると意見があった。また、1 年生の部活動加入率が非常に高い点について、全国的にも珍しいとの意見があった。 ・進路指導部より、総合型選抜合格率と年内入試が増加傾向にあること、国公立大学合格者があったこと、リハビリや看護の希望者が増加傾向にあることを報告した。また、生徒一人一人に合ったきめ細かい指導を行う具体的な取組み予定の一部について報告した。委員からは、希望進路の実現には、いかに目標を早く決めて対策できるかが重要であるとの助言があった。また、社会福祉をめざす人が全体的に減っており、保育や社会福祉へ進む道も積極的に勧めてほしい、という意見があった。 ・「生徒による授業アンケート」の項目について、原案が承認された。 第 2 回学校運営協議会 ① 開催日 令和 6 年 11 月 29 日（金） ② 学校運営協議会からの意見など ・授業見学を行い、「どの授業も生徒が一生懸命取り組んでいる」「ペアワークを取り入れるなど工夫し、わからない気持ちを持ち続けながら粘り強く取り組もうとする生徒を育てているところが印象的」等の感想があった。 ・観点別学習評価について、評点の変化の有無について質問があった。他の多くの高校と同様、評定 5 が出にくくなり評定平均が低くなるのが起こり、昨年度内規を検討し直したうえで運用している旨を回答した。 ・経験の少ない教員の育成についての取組みについて質問があり、5 年ほど前から有志が企画運営している自主勉強会の活動の様子を説明した。 ・自己有用感を育む活動や大学生のインターンシップ受入れ等、人として成長できる学びを提供しており、学校ならではの、教室ならではの学びがある点を評価する意見があった。 ・欠席、遅刻が多いことの理由や特徴についての質問があった。本校に限らず、コロナを一つのきっかけとして、学校は間に合うように行くものだという意識が弱くなっており、休むこと、遅刻することのハードルが下がっている、と回答した。 ・グローバルコースを選択する生徒が減っている理由について質問があり、それに対して国際系の学部は人気だが、外国語学部は不人気という情報提供が委員からあった。 ・指定校推薦の人数が減り共通テスト受験者数が増えたことは増減が他校と真逆であり、どのような取組みの成果か質問があった。2 年次後半から大学進学希望者対象に過去の実績や傾向等の説明を何度か行ったが、特段大きな取組みはしていない、と回答した。 ・令和 7 年度使用教科書について、採択教科書と採択理由の報告を行った。 第 3 回学校運営協議会 ① 開催日 令和 7 年 2 月 19 日（水） ② 学校運営協議会からの意見など ・令和 6 年度学校評価について、次のような報告があった。 ・今年度は生徒対象アンケートの結果が非常に良い。評価指標として生徒対象の学校教育自己診断を用いている箇所が多いため、自己評価の部分も良い結果となった。 ・学力向上については、生徒の肯定的回答が目標とした数値を達成し、昨年度の結果も上回った。授業の事前事後学習の実施率はようやく目標とする 85％を超えた。 ・行事の工夫については生徒アンケート、教員アンケートとも肯定的回答が 90％を大きく超えた。部活動については、1 年生・2 年生とも途中退部が非常に少なかった。遅刻数は依然として多い状態であるが昨年度よりは大きく減った。 ・生徒アンケートの「気軽に相談できる先生が存在」の肯定率の大きな伸びは際立っており、教員が生徒に寄り添い丁寧に対応を重ねてくれていることが確認できる。 ・グローバル専門コースや国際交流の取組みは生徒の満足度が高い。異文化理解の取組みも多くの学びの機会が設定できており、アンケートでも生徒、教員の 90％以上が肯定的に回答している。 ・時間外勤務が非常に多い教員数は大きく減少し、目標は達成できた一方、学校平均値は前年度に引き続き減少したものの、当初の目標には届かなかった。業務負担軽減の一助にと生成 A I を試行的に利用できるようにし研修を行なったが、まだ活用は進んでいない。 この報告に対し ・学校生活の充実を考える上では、楽しめるか、ということも重要であり、生徒が学校を楽しめているからこそ肯定的な評価が高いのであろう、という意見があった。また、他のところでは評価が右肩下がりでであるという報告を聞くが、芥川が高い評価を得るのは丁寧な取組みをしている結果であるという意見もあった。 ・気軽に相談できる先生が多いということも、教員の取組みが生徒から評価される要因である、という意見があった。 ・生成 A I の利用について、生徒への指導はあるかという質問があり、これからの課題である旨を回答した。それに対し、「使うな」ではなく「使いましょう」から指導してしていく方が良いとの意見が出された。 ・令和 7 年度学校経営計画について、文言の修正や数値目標の上方修正等、今年度からの変更点を中心に説明し、了承された。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的 目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R 5 年度値]	自己評価
1. 自ら考え行動し、自律的・主体的に学びに向かい進路を切り拓く力を持った生徒の育成	1) 学力の向上			
	ア 確かな学力を身につけ好奇心を掻き立てられる授業を創るための 教職員が学びあえる環境づくり	ア・授業アンケートの振り返りによる授業改善 ・学校全体で相互授業見学を実施し、気づいた長所を見学シート等の利用により必ず伝えあう。	ア・生徒向け学校教育自己診断結果における教科指導への肯定率 75%以上を維持 [79.7%]	ア. 授業アンケート振り返りシートの提出や、首席・10 年経験者研修対象者からの相互授業見学と見学シートを用いた事後の意見交換の呼びかけを行った。[87.2%] (◎)
	イ 言語活動の充実と、より効果的な ICT 機器の活用のための体制の構築	イ・言語活動に重点を置いた校内研究授業を実施する。 ・ICT の活用に関するアイデアやツールを共有・ストックし、それをより多くの教員が効果的に利用できるようにするための研修等を実施する。	イ・授業アンケートにおける授業満足度（興味・関心・知識・技能に関する生徒意識）80%を維持 [86.6%] ・生徒向け学校教育自己診断結果における ICT 活用の肯定率 80% [79.7%]	イ・5～9年め研修受講者2名による表現活動を含む授業実践の報告会を 11 月に実施。教員間での授業方法の検討については教員の肯定的意見が増加しており、学校全体での授業改善の取組みを更に充実させたい。[88.2%] (○) ・教員間で教材やノウハウの共有が進んでおり、必要性和個々のスキルに応じて活用されている。[86.1%] (○)
	ウ 観点別学習評価の円滑な運用と自学自習力の育成	ウ・各教科の観点別評価規準を教科オリエンテーション等で生徒へ周知し向学心を高める。 ・週末課題等、自学自習力をつけさせるための取組みを行う。	ウ・授業アンケートにおける授業の事前事後に必要な学習の実施率 85%をめざす [84.4%]	ウ. 観点別学習評価については4月に各教科より生徒へ周知。昨年度の内規見直し以降、特に問題なく行えている。授業ごとの課題提示や週末課題、小テスト、講習など、授業以外の学習を意識づける取組みは個人レベルであるが多くの教員が取り組んでおり、学ぶ意欲を喚起している。[85.9%] (○)
	2) 希望進路の実現			
	ア 望ましい 勤労観・職業観を持ち、主体的に進路選択できる力を育むキャリア教育の推進	ア・「憧れる存在をみつけよう」をコンセプトに、卒業生や外部人材による進路講話やガイダンスを通して、社会に貢献する自分像をイメージできるようにする。	ア・生徒向け学校教育自己診断結果における進路指導(進路や生き方について考える機会の提供) への満足度 90%以上 [90.7%]	ア. 職業ガイダンス、分野別ガイダンス、進路別ガイダンス等を学年単位で実施。学校別進路ガイダンスや看護系大学・専門学校のガイダンスを希望者対象に実施した。インターンシップの大学生を受け入れ、授業への入り込みや座談会等で話を聞く機会を設けた。[94.6%] (○)
	イ 個々の生徒の想いを受け止め希望進路に応じたきめ細かい進路指導	イ・個別懇談等により、一人ひとりきめ細かい進路指導を実施し、進路実現に向けて頑張り切れるよう支援する。また、活動記録を適切に残し活用する。 ・外部教育産業を活用して、「学びの基礎診断」の分析結果を各教科・学年団で共有することで、指導の振り返りと計画、面談等に生かす。 ・「進路のてびき」の有効活用や保護者向け進路講演会等で、早い段階から希望進路実現に向けた意識を高める。	イ・生徒向け学校教育自己診断結果における進路情報提供への満足度 90%をめざす [89.4%] ・保護者向け学校教育自己診断結果における進路情報提供への満足度 80%以上 [78.6%] ・希望進路達成率 85%をめざす [88.4%]	イ. ・上に記載の取組みをはじめ、進路指導部による個別面談、進路説明会・進路 HR、面接対策の説明会等、多くの機会を設けたことが、満足度向上に寄与したと考える。[93.7%] (○) ・3者面談の期間を増やし、進路指導の充実と保護者との連携強化を図った。保護者向け進路講演会を 2 回実施した他には、保護者への情報提供を大きくは増やせなかった。[81.4%] (○) ・希望進路達成率は 87.0%であった。(○)

府立芥川高等学校

2. 自己肯定感を高め他者を尊重する態度を養い、高い規範意識と人権意識を備えた豊かな人間力を持った生徒の育成	1) 体験学習の充実 ア 福祉ボランティア実習の充実	ア・保育実習及びその事前・事後指導を充実させ、福祉に対する意識をより高めるための機会とする。 ・高齢者疑似体験や障がい者施設での実習等、福祉ボランティアに関する体験学習の可能性を探る。	ア・生徒向け学校教育自己診断結果における福祉ボランティア等に関する肯定率 80%を維持 [86.1%]	ア、2年生全員と3年生「発達と保育」選択生で、それぞれ保育園実習を実施。3年生については2学期中に複数回実施できた。地域の多くの事業所のサポートを得て、昨年度に続き2年生全員が高齢者疑似体験や車いす体験を実施した。[90.8%] (○)
	イ 地域と連携した体験活動の充実	イ・地域主催の行事等への積極的な参加やボランティア活動、近隣の他校種との交流等を通じて、地域を愛し、地域に愛される体験の機会を持つ。	イ・生徒向け学校教育自己診断結果における地域交流への肯定率75%以上 [75.0%]	イ、地域行事への参加や中学校との部活動交流、ボランティア活動等の地域交流は、複数のクラブで複数回実施した。部活動が主体となることが多く、肯定的回答の増加は部活動加入率の高さも一因であると考えられる。[83.4%] (◎)
	2) 学校行事 部活動の振興 ア 主体性・協働性の涵養、地域とのつながりによるシティズンシップの涵養	ア・生徒が行事に主体的に関与して協働的に取り組みやり切る経験ができるよう、サポートを強化する。 ・学校行事への地域等関係団体の招待など地域や近隣施設との連携を深める。	ア・教職員向け学校教育自己診断結果における行事充実への工夫の肯定率90%以上を維持 [94.6%]	ア、生徒の主体的が発揮される行事とするための工夫が重ねられており、次年度体育祭の改良に向けて生徒たちが取り組む動きも始まっている。中学生の文化祭入場、近隣こども園園児の体育祭・文化祭招待等が行えた。[93.7%] (○)
	イ 部活動の活性化	イ・行事において部活動部員の活躍の場を設け、学校全体で部活動を応援する雰囲気をつくり、入部率および継続率向上を図る。クラブ単位での外部連携を深める。	イ・6月時点の部活動加入率75%以上 [73.6%]	イ、1・2年生の部活動加入率が6月時点で86.8%と大きく改善、11月時点でも85.0%と高い水準を維持しており、部活動参加を促し定着をサポートする教員の働きかけが奏功したものと考えられる。[79.6%] (◎)
	3) 規範意識の醸成 ア 生徒が自主的にルールやマナーを守ることができるようにする。	ア・全ての教職員が「あくたベース（生徒指導編）」に基づいた統一した指導を行う。 ・ルール・マナー・モラルを守ることが、皆が安心して安全に過ごせる場をつくることにつながることを伝えていく。 ・あらゆる機会を通じて生徒に夢や生き方を語り掛け、一人ひとりがなくてはならない存在であることに気づかせる。	ア・懲戒件数を5件以下とする [6件]	ア、「あくたベース」は毎年見直しがなされている。校則を守っているかを問う学校教育自己診断項目の肯定的回答は生徒が95%以上であるのに対し、教員は60%余りである。生徒の「ここまでできればOK」の基準がレベルアップするよう、協力して取り組んでいきたい。懲戒件数は低い水準を維持している。[4件] (○)
	イ 生徒指導や安全教育等、あらゆる機会をとらえての規範意識の向上。挨拶がしっかりとでき、時間を守る生徒の育成。	イ・自らと身の回りの人を大切にすることがすべてにおいて優先するという日常的な指導を徹底し、交通安全指導や防災避難訓練、薬物乱用防止教室等様々な機会も利用して、規範意識の向上を図る。 ・遅刻指導により、時間を守り、学校生活を大切にする生徒を育てる。	イ・生徒向け学校教育自己診断結果における規範意識への肯定率95%以上 [94.5%]	イ、規範意識の向上については交通安全指導や薬物乱用防止教室等の特別な機会だけでなく日常的・継続的な指導が行なわれた。昨年度に続き方法を見直した遅刻指導については、状況の改善は限定的である。生活習慣を整え学校生活を大事にする意識の涵養を訴えていきたい。[96.5%] (○)
	4) 人権意識の向上 ア 一人ひとりを大切にする人権教育の推進	ア・身近にある人権課題を見逃すことなく、全教員が一貫性のある人権教育を推進する。 ・保健室での聞き取りや教育相談委員会での情報を活用し、スクールカウンセラーや専門機関等と連携して、生徒、教員一人ひとりを大切にするために教育相談をさらに充実させ、生徒の成長を支援する。	ア・生徒向け学校教育自己診断結果における人権教育への肯定率85%を維持 [91.9%] ・生徒向け学校教育自己診断結果における気軽に相談ができる教員の存在の肯定率 65%以上を維持する [67.2%]	ア・人権教育推進委員会を中心に人権課題を共有し、計画に沿った人権教育を実施できた。[91.5%] (○) ・定期的に開催する教育相談支援委員会を中心に、職員会議等の機会を利用して支援の必要な生徒について全教員が情報共有し生徒を支援した。生徒に寄り添う教職員の思いが生徒にもある程度届いていることが、学校教育自己診断結果から推測される。スクールカウンセラーや専門機関等とも連携協力し、個に応じた対応がなされた。[75.3%] (◎)
	イ 生徒、教職員が共に学び人権意識を高める。	イ・人権教育計画に基づき、教科や特別活動等、学校教育活動全般を通じて人権教育を実施し、一人ひとりを大切にする教育を実践する。 ・生徒のみならず、教職員も人権に関する学校内外の研修に積極的に参加し、人権意識の向上を図る。	イ・教職員向け学校教育自己診断結果における人権教育への肯定率90%以上を維持 [94.6%]	イ、教員研修、生徒の人権研修とも計画通り行えている。生徒・教員とも学校教育自己診断における人権教育に関する肯定率は9割を超えているが、教員については2年続けて微減しており、原因を考える必要がある。[91.3%] (○)

府立芥川高等学校

3. 多様性や異文化を理解する態度を備え、豊かな教養とコミュニケーション能力を身につけた、グローバルな視点で考え社会に貢献できる力を持った生徒の育成	1) 使える英語力の育成 ア 高大連携等「グローバル専門コース」の取り組みの継続・発展と、実用性の高い英語力育成 イ 生徒の英語に関する資格への関心を高め、英語検定等の資格取得推進 2) 国際感覚の育成 ア 海外交流生の派遣や受け入れ等、国際交流の促進 イ 国内で実施可能な異文化理解の機会の創出	ア・グローバル専門コースにおいて、平常の授業との関連を密にし、高大連携による特別授業や留学生等との英語での交流など、取り組みを継続・発展させる。 イ・校外の英語力向上プログラムや人材の活用、授業等を通じて英語4技能を育成し、検定試験の校内受験機会の設定や対策講座の実施により資格取得を奨励する。 ・令和5年度に立ち上げたグローバル専門コースの種々の取り組みを継続・発展させると同時に、コース以外の生徒にも広げていく。 ア・海外交流生の短期語学研修受け入れを実施する。並行してオンラインやカード等を用いた国際交流体験の機会も設ける。 イ・異文化理解をテーマとする修学旅行、留学生やJICA 海外協力隊経験者による講演など、国内外の様々な文化理解を目標とした学習を実施し、日本に住む高校生としての国際感覚に根差したアイデンティティを育む。	ア・授業アンケートにおけるグローバル専門コース選択科目の授業満足度 90%以上を維持 [94.6%] イ・英語検定等の資格取得者数 65 人以上 [48 人] ア・国際交流プログラムに参加した生徒の満足度 95%以上を維持 [100%] イ・生徒向け学校教育自己診断結果における異文化理解の取り組みへの満足度 80%を維持する [86.1%]	ア、外部人材による講義や留学生との交流、海外交流校との交流等、昨年度充実させた種々の取り組みを継続実施した。内容の充実を専門コース選択生の増加につなげていきたい。[92.8%] (○) イ、[38 人] (△) 第2回は校内実施なし。英検1次合格者を対象に面接対策講座を実施し資格取得をサポートしているが、受検者数は減少し続けている。生徒の意欲喚起と並行して、校内実施に伴う教員の負担を軽減するための実施方法の再考が必要になっている。各学年の英語の授業において AET の活用が促進できた。 ア、オーストラリアのミラニ高校からの短期語学研修生受け入れを再開。前年度に引き続きミラニ高校とのオンライン交流、フランスの高校とのカード交換、専門学校の留学生との交流等を実施し、十分な量の取り組みが維持できた。[96.4%] (○) イ、異文化理解をテーマに修学旅行や「総合」のフィールドワークを実施し、一部生徒は JICA 関西での研修を行なった。京都外国語大学教授による講演や JICA 海外青年協力隊経験者による講演、OFIX 国際理解教育支援サポーターによる講演、専門学校の留学生との交流など国際理解・国際貢献について学ぶ機会を実施できた。[90.8%] (○)
4. 信頼される学校づくり（教員力と情報発信力の向上）	1) 次世代を支える教員の育成とチームとしての教員力の向上 2) 教職員の働き方改革による時間外勤務削減 3) 開かれた学校をめざした、学校情報の積極的な発信 4) 中学生やその保護者に対する、芥川高校の魅力発信	・種々の取り組みの充実と並行して、業務の軽減・円滑化・合理化・平準化・効率化を図り、教職員が連携協力し支え合う余裕を生むことで組織力の向上を図る。 ・「何かありますか」から「これやりますね」への移行を図り、お互いの声をかけ合い、助け合い、学び合う組織文化を醸成する。 ・次世代を支える教員が中心となって企画運営する、「もっと知りたい、もっと良くなりたい」がフランクに言える教員の自主研修などによって教員力向上を図る。 ・ICT の活用や部活動の適切な休業日設定、業務のスクラップによる軽減等、働き方改革を推進し時間外勤務削減を図ることにより、教職員の健康とワークライフバランスを守り、教材研究や生徒と向き合う時間、自主研修時間の確保に努める。 ・学校部活動方針（休養日等）の遵守及び全校一斉退庁日の遵守を推進し、時間外勤務の圧縮を図る。 ・メールマガジンやホームページ等を活用し、必要な学校情報をよりタイムリーに発信する。 ・学校ブログ等に生徒が寄稿し、日常の学校の様子や取り組みを生徒の視点と言葉で発信していく。 ・学校新聞「芥川」を地域と学校をつなぐツールと捉え有効に活用し、広報活動をより一層充実させる。 ・「芥川高校の生徒教職員の魅力」が詰まった学校長ブログを積極的に発信していく。	・生徒向け学校教育自己診断結果における、教員の協力体制に関する肯定率85%以上を維持 [88.5%] ・月80 時間を超える時間外勤務教職員の延べ人数を引き続き減少させる [2月末まで延べ 43 名] ・教職員一人当たりの月間平均超過勤務時間を令和5年度より 8%削減 [1月まで 32.5 時間] ・保護者向け学校教育自己診断結果における家庭への情報提供に関する肯定率 85 % [84.3%] ・オープンスクールおよび学校説明会への参加者 1050 人以上。[990 人] ・年間 85 本以上 [87 本]	・学校全体の平均時間外勤務は減少傾向にあるが、個々の工夫には限度があり負担感は大い。業務削減の検討を引き続き行なっていく。教員向け学校教育自己診断における相談し合える人間関係に関する肯定率が 90%を大きく超えており、教職員間の風通しの良さを学年・分掌の連携につなげたい。次世代を支える教員が企画運営する自主研修は各学期に1回ずつ開催、情報や思い、課題意識などが共有されチーム力の向上に寄与している。[91.9%] (○) ・学習指導・行事・部活動の充実等、学校の魅力づくりと時間外勤務削減の兼ね合いに注意していきたい。校務用端末の更新業務と、更新に伴うトラブル続発は負担が大きかった。[2月末まで延べ34 名] (○) ・部活動方針遵守の意識向上と各教職員の努力により月間平均超過勤務時間は前年より減少した月が多いが増加した月もあり、平均すると2.5%程度の削減にとどまった。[1月まで31.7 時間] (△) ・保護者メールマガジンによる文書配布が定着し記載内容は確実に伝わるようになったが、事務連絡の要素が濃く、取り組みの紹介は学校新聞と校長ブログが中心となっている。学校情報の発信として SNS 活用の準備を進めている。[83.3%] (△) ・学校説明会は生徒が運営や学校生活紹介に協力してくれており、参加者に好評である。マスコットキャラクターの決定や、学校説明会のPR チラシの追制作成等、広報を充実させたが、参加者数は2年連続で大きく減少し、目標を下回った。2月に個別相談会を実施した。[90.8 人] (△) ・校長ブログは 91 回発信した。(○)